

タケ、ササとバンブーの名義

室 井 綽

タケの語源は、万葉集抄によれば「タとは高き義なりと、又ケとは古語に木をケと呼びタケとは高き木の意なり。」とある。

また、松村任三博士の溯源語彙や漢字和音によれば、日本の言葉は中国の文字の音から変化したものが多いことを主張し、(籜) 直角切、音濁、竹名) はタク tak だから、日本語として take に変つた。」という。

あるいは、カールグレーンの「言文学と古代支那」^①によると、

近代日本語	古代日本語	北京語	古代支那語
take	take	竹 chu	t'iuk

中 略

母音の上では、take と t'iuk は一致しないことは事実である。しかし、東アジアの主要な培養植物の1つであつて、極めて多種多様の用途を有する竹の使用法を原始日本人が中国人から学ばなかつたと言うことは殆んど信じ得られないことである。t'iuk は西歴六世紀の発音であつて、それより数世紀以前には恐らく一層広く開いた母音を有していたと言う事実を take という言葉が示しているものと思われる。と主張しているのである。

しかし、私はどうも上の諸説には賛成できない。

たけ(竹)、たけ(菌)、たけ(岳)、たけ(丈)、たけし(猛)、たかし(高)、日たけたり、年たけたり、智たけたりなどの一連の日本語から、たけし(形容詞)、たかし(形容詞)や、たく(動詞)の tak という語幹をもとにして、生れたものと思われてならない。

すなわち、猛烈なる、盛んなる、長ずる、高くなるなどの意味を含んだものと思われる。特に「勢い盛んにどんどん伸びる」というのが原義であると思われる。葦(タケ)というのは、「たけしい、くさびら」という意味であろう。その猛しさが語源となつてタケができたと考えられてならない。恐らく葦は男性器の形よりも猛しさと一連のものと思われる。

思うにタケの語源は「筍の生長の早いこと」が名のおこりで、他のいずれの植物よりも短時日に著しく成長するので、これが名となつたものと思われる。これ

に対して、ただ「高い」ということだけであると、他にもつともつと高いものが幾らもあるから、単にそれだけのことがらが語源となつたものとは考えられない。

竹の字は本草綱目に「時珍曰く、竹の字は象形であつて、許慎の説文には、竹は冬生の艸である。故に字は倒まの艸に従う。」(もと漢文)とある。

この竹の字のもとになつたと思われる種類は、日本や中国で広く栽培されているマダケ、ハチク、モウソウダケなどのマダケ属の形態を基にして作つたと考えられる。この属のものは各節から、殆んど2本ずつの枝が出ることと、充分成長した枝先には殆んど3枚の葉が着いていることである。マダケなどの藪に入つて枝葉を眺める時、古人のその鋭い観察眼に先ず頭が下る思いがする。

ササの義は大言海によれば^{ササダケ}「細小竹の下略、或は言ふ、葉の風に吹かれて相触るる音を名とし、竹の異名にしたるなり」と、また松村任三氏の溯源語彙によれば「籜はSaで、小型の竹の意、これを重ねてSa-saになつた」という。

ササと俗間でいうのは、山麓などに生ずる小型のものを指す時と、単に竹の葉を指す場合とがある。すなわち、前者の場合では細竹^{ササダケ}の下略かと思えるが、後者の場合には、竹の葉と葉が風に吹かれて鳴る音「ササ、ササ、ササ」が名と成つたと考えられる。しかし、前者は文化の程度の低い時代の人々の口からほとぼしり出た名とはどうしても考えられない。むしろ、文化の進んだ人々の考えだした語源説であろうと思われる。根拠は不十分であるが恐らく、葉々、相触れる音からササの名が生れたものと思われてならない。

笹の字は和字である。橋正一氏の全国植物方言集(昭和14年)によると、宮崎、鹿児島、和歌山の諸地方で竹の節間をヨ、またはヨーと呼ぶ由、笹は竹に比べて節間が短いから大槻文彦先生のいわれる、節^ヨを世に代え、竹に寄せて、笹の字が生れたものであることが領かれる。

① ベルンハルト、カールグレン (B. Karlgren) の著、古文学と古代支那 (Philology and Ancient China)。

この書は岩村忍、魚返善雄共訳、支那言語学概論、文求堂発行、昭和15年刊。

なお、笹に漢字名の篠^①を当てなくてはならないなどと主張する学者があるが、もともと日中両国で、それぞれ違った植物に対してつけられた名で、和産のササに、漢名の篠を結びつけることの方が、余程、不自然な、非科学的なことである。

我々の祖先は竹と笹をどうして区別して命名したかという、稗を利用してはいるものには〇〇ダケ、葉を食器とか観賞用などに用いたものには〇〇ササと命名した。例えば竹として稗を利用したものではマダケ、ハチク、ヤダケ、スズダケ、カンチク、ネマガリダケ、シノダケ、ゴキダケなどで、笹と呼んだものにはクマササ、チマキササ、ネササ、オカメササなどである。

しかし学問的には、竹と笹の区別は、タケノコが筍の成長後に落ちるか、あるいは永久に着けているかということで、前者を竹といい、後者を笹と呼ぶことを私が提唱した。上記の種類で竹の類にはマダケ、ハチクでヤダケ、スズダケ、カンチク、ネマガリダケ、シノダケ、ゴキダケなどはクマササ、チマキササなどとともには笹のグループである。また、オカメササは上

のような見解から1mに足らぬ小型であるが竹の1種である。

バンブーの語は東南アジアの植物が産んだ言葉である。マレー半島などの竹類は地下茎の先端が上向して稗となる。それ故、稗は肉が特に厚く、簇生する。この多数の稗が大火にあると節間の空気が膨張して、厚い材を裂き、熱せられた空気が裂け目から吹き出るのである。この音を聴くと、大きくバンブー、バンブーときこえるのである。同時に熱い空気が吹き出るのである。それで遂に、マレー地方の土人がその音からバンブー *Bambu* といひ出したといわれる。

その後、東西の交通がさかんになるにつれてバンブーの稗と名称が西洋各国に伝わり、同一発音バンブーを語幹として転化したと思われるのである。すなわち、インド語では *Mambu (= Bambu)*、スペイン語では *Bambú*、ポルトガル語では *Bambú*、英語では *Bamboo*、ドイツ語では *Bambus*、フランス語では *Bambou*、ソ聯語では *Bambuk*、イタリア語では *Bambú*、オランダ語では *Bamboes*、ラテン語では *Bambusa* と語尾が変化している。

① 武田久吉、民族と植物、144ページ、(昭和22年)

新刊紹介

六甲山系植物誌

神戸市農政局編

本書は神戸市の委嘱によつて京都大学農学部岡本省吾先生が昭和11年から25年まで四季に亘つて採集調査されたもので、六甲山を中心として神戸市の海浜から、東は武庫川、西は明石川、北は丹上山、帝釈山、千刈までの間の自生、または栽培品を含むシダ植物以上の調査報告書である。

調査記録した植物は159科、651属1200種、214変種、35品種である。この植物種類数は本県所産の殆んど大部分を占めている。我々の最もよきことばしいことは各科名の次に属の検索表があり、続いて種類の検索表が付けてある。検索表には専門書と違い、莖葉の形態に重きを置いているので一目で種類を決定することが出来る。また種類の次には実に要領を得た説明も記載されていることである。それ故、どんな初心者でも自由に、本書に基づいて種類を決定することが出来る

ことである。また、牧野富太郎先生などの植物図鑑は主として関東辺のものと、関西の普通種とであるが、本書と図鑑が揃うと誰でも容易に種類を決定出来ることである。それ故、単に神戸住人だけでなく、関西の方なら大いに利用して戴くことの出来る好著である。

なお、口絵は美しい64枚の写真と附属には学名、和名の丁寧な索引が付けてある。

出版は神戸市農政局で非売品として出版されたものであるが、特に篤志家のために50部が市販されたから、希望の方は至急注文されることを御薦めする。

B5版、145ページ、上質紙使用、写真64枚、本製本、定価1,000円、送料50円、昭和30年8月31日発行、

発行所、大阪市大淀区中津本通2丁目104、六月社
(室井 綽)